

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆家	隸書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
剩	ジョウ あまつさえ あます あまる								剩 瑠玉集
剩	人②								剩 性靈集
副	フク フツ そ								
割	カツ わる わられる さく								
割									
創	ソウ つくる きず はじめる								
刃									
剗									
劃	カク くぎる かぎる わかつ								
劇	ゲキ げげしい								

【副】説文籀文と五経文字の字体が合致する。  
【割】通用字体では偏を「害」ではなく「ㄩ+十+口」を書くことがある。説文解字の前後の時代の字体を見比べると、説文の字体が特異なようだ。説文に倣った五経文字や康熙字典も特異な字体だ。「割」が一般的になるのは元の馮子振以降。

途中で魏の鐘繇の「宣示表」が一例だけ「割」を書いている。日本で「割」が見られるのは、平安時代の墨流本朗詠集。  
【創】説文解字の上の2例は「傷也」、3例目は「罰畢也」とあるので「刑」に近い字かもしれない。説文解字の大徐本と段注本の字体が異なる。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん こころ	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
剩	剩	剩	剩	剩			剩	剩		剩		剩 中国
												剩 台湾 剩 香港
			副				副	副		副		副 中・台・香
割	割	割	割	割	割		割	割	割	割	割	割 中国
割	割			割								割 台湾 割 香港
割												
創	創	創	創	創			創	創	創	創	創	創 中国
												創 台湾
												創 香港
												劃 台湾・香港 劃 中国
劇	劇	劇	劇	劇			劇	劇	劇	劇	劇	劇 中国
劇	劇			劇								劇 台湾 劇 香港

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。



親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆家	隸書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
劫	キョウ ゴウ コウ おびやかす かすめる 人①		𠄎	劫	劫	劫	劫	劫	光明皇后 業教論
劫	②		𠄎			劫	劫	劫	光明皇后 社家立成
劫						劫	劫		
助	ジョ すけ たすかる たすける 教3 常①		𠄎	助	助	助	助	助	王勃詩序
			助	助	助	助	助	助	
努	ド つとめる ゆめ 教4 常①				努				美努丘萬墓誌
								努	招来目録
励	レイ はげむ はげます 常①					励	励	励	王勃詩序
励	②					励	励		
劳	ロウ はたらく いたわる つかれる ねがらう 教4 常①	𠄎	勞	勞	勞	勞	勞	勞	王勃詩序
勞	段②	勞	勞	勞	勞	勞	勞	勞	聖武天皇雜集
		勞	勞	勞				勞	聖賢指歸
効	ガイ しらべる あばく 常①		効	効	効			効	干祿字書
				効				効	五經・力部

【劫】干祿字書は「劫」を〈通〉、「劫」を〈正〉としている。五經文字は解説に「……従刀者本之或體今經典並従力」とある。

【助】古代から偏の一番下の横線を「にょう」のように旁の下まで伸ばす字体があった。草書にもその字体によるものがあるが、草書では偏の一番下の横線を最後に書く。南北朝期は偏を「目」とした。五經文字に「従目訛」とある。日本でも偏を「目」とする例が多数派で、漱石も太宰もその字体を書いている。

【努】新しい文字らしく篆書や隸書では「努」を使う。

【励】「勵」の「萬」を「万」にかえた字体。宋代の印刷本にあるが、書道字典には見えない。日本では江戸時代に多く使われる。弘道軒には四号にも三号にも「勵」の字体しかない。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん こころ	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
劫	劫	劫	劫	劫			劫					劫 劫 干祿(通) 中国・台湾
劫	劫	劫										劫 香港
		劫										
助	助	助	助	助	助		助	助	助	助	助	助 中・台・香
							助					
努	努	努	努	努			努	努	努	努	努	努 努 北宋・蘇軾 中国
	努											努 努 台湾 香港
励	励	励	励	励		励	励	励	励			励 励 中国
	励					励	(勵)					勵 勵 台湾 香港
劳	勞	勞	勞	勞	勞	勞	勞	勞	勞	勞	勞	勞 勞 段注・力部 中国
	勞	勞					(勞)					勞 勞 段注古文 台湾
												勞 香港
		効	効				効	効				効 効 干祿(通) 中国・台湾
												効 効 五經(版本) 香港

【効】武威漢簡では効が「刀」。干祿字書では効が「刃」の字体が〈通〉。干祿字書と五經文字の字体が異なる。五經文字の拓本と版本の字体が異なる。

【効】「効」二つを点三つに略すのは江戸時代から。説文解字の大徐本と段注本の古文の字体が異なる。



親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆書	隷書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
動	ドウ トウ うごく うごかす								王勃詩序
務	ム つとめる つとまる								聖武天皇雜集
勤	キン ゴン つとめる つとめしむ								聖武天皇雜集
勤	人③								聖武天皇雜集
勝	ショウ かまざる すぐれる たえる								王勃詩序
勝									
募	ボ モ つ の								光州聖母社 家立
勸	カン ケン すすめる								聖武天皇雜集
勸	②								性靈集
									大聖武

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん こころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
動												動 中国
												動 台湾・香港
務												務 中国
												務 台湾・香港
勤												勤 中国・台湾
												勤 香港
勝												勝 中国
												勝 台湾
												勝 香港
												勝 台湾
												勝 中国・香港
												募 台湾
勸												勸 中国
												勸 台湾
												勸 香港

【務】「力」を下部中央に書く移構の文字がある。「支」は「攴」に変化するが「攴」に誤ることがある。弘道軒が「攴」に誤った字体。中国も「攴」の字体。

【勝】説文では「力部」、五経文字では「舟部」に収録。干禄字書で偏の「月」の中が横線なのを五経文字で点に訂正し、

「ふなづき」として「舟」部に載せている。康熙字典も文部省活字も同様に点。当用漢字表も点であった。

【募】康熙字典ではこの字の「くさかんむり」を4画に数える。